

810-1 (清)
俳諧資料カード

年代 明治

編者 (筆者) 路邑

書名 反古集

備考 寄稿

(下垣内蔵)

石古供養

京市阿賀北五丁目三十三番八号
下垣内和人
電話〇六三三二一九六五番
737

路宅

定のあおと塀のちり茶つに記

年河けくからく渡るふる

水小れ山の雀も子奴もちて

あまのの涙をこけくとりて

月と秋さちんも森たはおえさ

うそきくおれは是乃記

木海
雀老
宅
海
老

銚子池裡鮒の杖をほのめし
社に草乃ひつりつくとく
屍に去く狐は皮も何きやすく
目貫ほるとく香の目をまら
お袋の棹一葉此木乃花籃
ゆ若に形りしにひとりのを括
張栲の口をわきのきぬ此月
船のたくりも灘筋のつゆ
海 宅 老 海 宅 老 海 宅

言取も草も幅何れ男ゆり
はよなく夏は秋も丑の時
藤の子枝花に草とくおし
池乃あちらのまゝはるわり
ゆき小木香にまじりし田舎酒
草色の了る千姆の鞍もある
ゆ里候とはうりれ文をせう某て
片派の日られ枝とち若てぬく
海 宅 老 海 宅 老 海 宅

一艘ふはしむ付本こけもさく
灰乃あなこれ何ふれかねつな
鳥とよけよの時るい空さうあ
屋根をうらよたけこれ寺
獨ふさうとつけもなきを
いこた人乃秋をきあお
とあなは虫よも月い何たさこ
叶^{チヨダ}藉^ダ茂^ダわりの春の梅書

厩 柏 宅 厩 柏 宅 厩 柏

くつきあのはつしにまをさふ
秋の上手れ金沢の御治
瓜先平貝壳あける船ほらけ
彼岬の鐘はとららもはく
煮いやりと折一の茶枝さうあ
凡中おひ何もく教もひの時

厩 柏 宅 厩 柏 宅

踏宅十二

木海六
篤老六
侘柏六
寒屋六

ここの日はたつた人にまきれけり

路宅

みな喉も乾草の世に中
梅ま

燕や何れおのりの陰も半て
淡藤

ちひさき紅を原に狭うら出れ
篤老

まろし人の船漕ておる月影ふ
ま

目の清めてわら下りえを如
宅

香煙の産をむけよほこれの秋
もはつゝを備へ穀の小佛
日ぬせたる所も一株の所也
けなりのうちも穉ねまゐる
養蚕ありぬも亦もあつてよき
と田乃さくら今うんさう
魚高き足智の継はえかあり
何をのり↑まゐる。大黒

光 蔭 宅 夫 蔭 光 夫 宅 蔭 光 宅

二十に一枚をらの葉の
杵のわらわらふ早稲をうば
精れたるれ平月のみのあり
たわけもぬく多た陣
浦崎ら益城持たる隅田川
上もにうそをうそ 誹諧
級屋住此十人車もあなのみ
ちりほくき原あをあまふ

光 蔭 宅 夫 蔭 光 夫 宅 蔭 光 宅

清らき川と花の咲きたる庭相の木
人おりに根れあける。たきち
は寺乃大半よみけお漢ひつ
甲家のみこれれよりとられた
河風小吹たつらさる馬の鼻
果臨り泣き月ぬれ
煤くきた紙子の埃さうちはたき
二重の窓あき河き板の間
光 蔭 宅 夫 蔭 光 蔭 宅

もろよきお鯉坂そのまいつけて
暮家園所をまけむ村の木
辰の刻南に雲のそいつきて
水茂皆中よよとせある家
ちの半はむかひ花よきうら
とらふあすの暮のそあひ
光 蔭 宅 夫 蔭 光 蔭 宅

路宅

梅 丈

淡 藤

篤 光

各九句

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

むう一踏もあつ宙の淡藤といつれ他女をわらまむ
 雨の屋に七目七根と矢く保となくゆりなほうあま
 まに名所のをーられいそものにまうぬ城陰より
 ーて強よかゆらまきて七目七根といふ目元
 人をとらふらぬくみつら香華とち人くをあつ
 めく庭裏れをうらものーはぬめの他女をかたは
 ーくはくせとあつてる古くかしくらふをを
 ーたりり。

ゆりき—むらさきらめきたゆりきげ 巴江

きりふやみ朝長屋の葉振音 京 月孤

雁鴨の仲をたさく陣たた 大坂 高瀬

櫓まう空掃おん大酒うな 色江 春太

あくさくに形おとせり友の雲 色江 茅之

畑うちに見ゆ秋二月の林よ那 肥後 對竹

人の集あろ喜の—て秋の糸 伊勢 砂臺

お—は久—年も三日やたひ室 伊勢 四溪

いづと—まめく

ゆりやう浪の花咲大る居 豊後 中翠

松の花おろけ—下をたうせり 豊後 藤家

松風りやめえ啼きり閑古鳥 豊後 普天

杉—方そのまたか—も花んぬ 越後 下唇

ひ—と耐るま—むや其ささ 出雲 袖紙

夕立の軒木ももの—あ—らうれ 河波 文百坊

葎に—く—はの—は— 河波 美柏

傳續く磯をなれりり香の舟 上総 一風

き垢齋や居るる淵も月の影 一方舎

りて舟も立ちて丁造り田舎り 筑前 雲守

書柳ふさぎめ一よけり船の馬 外山

羽来の月比夏菊咲よりり 播磨 其雪

吹よ来くともを麻うつを 遠に 李人

ゆく先につらくまゝるや秋のくれ 但馬 菊庵

吉家の白ひ川おまほへん 伝説 正河

友の秋は清ゆ〜 薩 鳥歸

旅人とんえりり花の尻からけ 相摸 雉啄

名月や家路をたより 料 乃山 暮三

りさの秋葎み〜 伊賀 若翁

あのみなち〜 畠 の屋に旅や〜

人〜 舟 きはかの舟〜 舟 の周みあけつ

七草やそらりぬうちらもひる

備後次伯

松濤

碓氷の中よ鳴り里 菫花子

安藝吉田

眠眈

碓氷れて夕日照らむ小暮りな

直躬

直躬

門さしと意の月さる。町家うた

才馬

才馬

木つきたはいて来にりり 和一丸

廉門

廉門

乃と水の編みあひり 喜甚

中野村

五庄

冬うかにひつき海はたの家うま

隆宗

隆宗

強うらやハ雪をさひりして

雙蛇

雙蛇

うらやや花をさひりして

凡十

凡十

赤のもーた子草をさひりして

玉相

玉相

東の雲乃目おみえりて

吉江

吉江

咲ぬふらえりてあたり 柳島

春平

春平

ものおとれりてあたり 相火桶

圭雨

圭雨

松の河を流るるるるるるるるるる

木意

木意

挽りやはらのなの人々毎の雪

後川

ほろほろの二葉のまへへつる哉

可古

近出のて馬はひらり夏の月

字大

藤の花よとやうに金川に小童

夏雲

乃其平一帯ありたけの根吹ぬ

其岳

山嵐や一帯の躍り何らさふ

馬川

秋風散るて強りふから減

柳塚

舟よきくくれか夢阿里流海峯

玉麻

みよねもぬらぬ柳の嵐小

栂末

漆のくさきあてりやまあらし

^偽 牛桑

まき一すうちの風何れ蜂の芥

松存

梅をおきくく日暮の山をたてある

木窓

岩や一粒空屋れ庭を写しとる

石哉

大坂や睡月の紅の葉ひらり

梅佛

鳥帽子見てこころあつきの水

昨秋

まの松川別れ減りてほろり

淇富

菊年や人よを花にたぐれぬ風

をさぬ子を帯よたせて柳女守

篋子や一板流した桶の水女生

有美う笑つゝいりり柳のたれ女十

曾やこをわさし秋のさうり女瓢

秋風や子にるふああ女白

涙暗いゆよも舞うら女泣

輪書のささげく木女の佳

大原哉一荷よおたる小菊女江

鶏卵の笑や日く女雲小鳥女三

志らあやや種女あ房や女毎の上女竿

木の葉や思ひ切たる女散と女衣

あれたうら尾花女はそれと女尺ら女切

飯糰小菴乃たう女は小女雲う女れ女踏

りよハ又儀一ゆ女くや女雲女巨女楯女文

危下板何くぬ女うち女あり女細女糸子女月

大和路ハ古き花の河の田の意ハ 魯瞻

保しきまぢひさしつや秋の芳 隆翠

さひきた出れ又鳴く人こそ 尼 菖香

志和村新屋敷左条の亭より

涼しさを朝子かけたる扇の 槐児

吾妹子うかきゆりや奈の園 嵐夕

題巴江老人醉舞之圖

夏の月つゞきさの木のよ 末春

垣ほのさきたる花の茶 蓮史

月影小なれは坂きのほろり 玄蛙

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '十' and '月'.

そは喉や山の小僧此処あるき 古人 芦更

十九ち羽十八土用つちり花、 世臺

かくとよらひくけりちの二人もたやとよ

らひ海の敷み入るる事者迅速乃とらり

のちからさや中よもせき重さを今由延

十人の一人をかききよ。断絶の思ひせん

まへを 世臺

世臺

舟のちらに管入るさ 世臺

はやくまぬ 篤光

くらねの里は淵深のほる哉 世臺

月おく个合 歡けさうき 雙託

直の金お花鹿の采に日のとて 須志

恰好のうた海女中着 後志

うい陸いみぬ葉お紋のーとらに
 鶴のきりさへおとすけり
 きのよらうら天葉かまの松の松
 摺津茂やへ塗をせくへ
 七朝はおきし挿し屏をあり
 袴のやれを難中にきり
 有の尺ぬきいさくち替の病
 采の契終ふとら菊れを
 売 屯 地 ち 売 屯 地 ち 売 屯 地 ち 売 屯 地 ち

やきれみ厚し速もおもらうん
 策松の清存茂ぬおこむ
 あい鏡乃まこ生ころた小侍
 今年の糸をぬふし何とち
 新田をゆすくち海へ花敷
 陽あきの不執葱乃あちい
 ちち風ふ翁れ面きさくかけ
 輪石の意にま婦をみりり
 売 屯 地 ち 売 屯 地 ち 売 屯 地 ち 売 屯 地 ち

は浦たの河をゆるるよ十子日
土用のうち此山の志の片
眼は咲むる一重の玉境
障きく度にから笑はる
入乃此様嫌そね花圍の編
美扶の城の月をるる年
志らあふかみ水は成湯な
聖の馳走ハも来。喜架

亮 志 托 さ 志 亮 さ 托

井層の畑をさくむ男も
寺ははけに杖の片く
香園にあられおる。玉敷
おらおほえなる妹、面さ
あつふた手垢も清き。大強子
ちひさき江中の原をれり
笛細の道も新浦のたれ
蝶の羽歌乃衣もなき空

亮 志 托 さ 志 亮 さ 托

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

舞ののほしき花の香も

篤光

雙靴

路宅

綾衣

各九句

きりしや鶴さしる部平島

出平

水玉の海ひか標ちるる

篤光

あすのふしの登れはらきて

宇柏

口にかたむし下根のまひもれ

路宅

あすの井ほあし月あはるる

光

解乃なくたむ露のあはるる

平

うそ言た梅さう若ふ火のまは
何うひのそと程のりささ
恐顔ふとり合たる。恐恋
うき身をおとせ木曾の機
竹撮の下へおけこむとささお
ハ手れ花に月のたさくれ
と屏くと藪の輪菊の人海
たさこの味れふとわらけ

手 さ 花 柏 さ 手 柏 花

桶よゆの枝の赤身を日よあはせ
刀はうり板れき一物甚
人別干灯火したる。茶のひ
あやとる。芥乃の夜催馬楽
海ハたハさ書よなる。まきの心
鉄にふさう敷えたる。茶の花
守及ふさ子の歌は合はれ
目利のまみ一。ぬみ香合

手 さ 花 柏 さ 手 柏 花

南天の冥ふ多代寄ふ六月
枕あぐれば聲のおくはる
蕙勝の小ねひれくつる暮聞集
ありなきを勅よなきは秋風
髪剃し妹の科も月の雲
森にまゐる藤よあおをやる
松陰の店よ古ひは豆腐箱
ふくむなをらへる水月その向

屯 柏 寺 柏 寺 屯 寺

伊賀流のさいつかりは疾原
出船を觸る浦乃とれく
百日もおめし年さる船の藤治
魚その虫坂よりはくしりり
こゝちのたをみはる家流
うらむれ水のさえおつる歌

屯 柏 寺 柏 屯

お、お

ちきりめいりくも何のちやの略
 ぬきまぬきまの二蓮のをりう哉
 竹まゝとれおれ留乃亦もあは
 宗柏 篤光

文化七年庚午六月

廣嶋屋路宅編



蕉門俳諧書林

京三條通寺町西

菊舎 太兵衛

和漢法書物并經類其外色紙經冊画半切
 板本細工活摺物亦通用此付下紙下以之

¥ 7.210